

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十七回　家族と祭祀

南出喜久治（令和7年5月1日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

宗教の個人主義に対して、祭祀は家族主義です。

祭祀は、祖先から命と魂を受け継ぎ生かされてきたことの感謝と感動を示す家族の行ひであり、実践しない者があつても祖先が憐れんで情けなく思はれることはあつても決して子孫に害を加へることはありません。信心といふ観念よりも実践が求められます。

たとへ生前に親子が憎しみ合ふといふ不幸な自体があつても、その親の死後は、親から祖先の一団に加はるので子孫を守る立場となります。

埋葬は、祖先祭祀の原型です。宗教が生まれる前から祭祀による埋葬が風習として宗教が継承したものです。

太古の昔の人類は、現代とは異なり、身近な人の死を直接に見届けてきました。いままで傍に居て話をしてゐた人が急に口を閉ざして息が止まり冷たくなつて固くなり、やがて体が腐敗して姿形が変はり果てます。死といふものが間近にあり、家族の中でそれを直接に受け止めてきました。

死者が生み育ててもらつた親であれば、悲しみに包まれながら感謝の心を捧げて、これからも家族を守り続けてもらふことを願ふのは自然に沸き起る気持ちです。

死者への感謝と願ひの信仰心が生まれて、丁寧に埋葬してお祭り、そのことは、親の親も、さらのその親も、ずっと祖先が同じ思ひで死者を埋葬してきたことを受け継ぎます。

そして、自然の恵みによつて生かされてきたこと、自然の脅威感によつて生活の在り方を学び、家族、氏族、部族、民族を様々な危機から守つた英靈への感謝と祭祀が自然発生的に行はれるのです。そして、先人の智恵と技術が蓄積して生活が安定してきたことにも感謝しつつ、次第に生活の余裕が生まれてくると、理性の働きによつて宗教を編み出してきたのが人類の歴史です。

祭祀の歴史は古く長く、宗教の歴史は新しいのです。そして、様々な宗教が生まれるのも、それが理性の産物であるためです。理性の働きは、人によつて千差万別であることが

宗教に多様性があることの原因です。

しかし、祭祀は、人類の根源的なものであり、本能の発露であることから、祭祀自体は多様性とは無縁ですが、祭祀の実践における祭事の態様に多様性が見られるのは、宗教儀式と同様に、理性の働きによって決まるからです。

そのため、埋葬の方法も多様化しました。一般に、土を盛るものを「陵」、土を盛らないものを「墓」と言いますが、墓（はか）とは、葬（は）ふるところ（処）の葬処（はか）です。

墓のことを奥つ城（おくつき）とも言ひますが、埋葬の場所を奥まつた清浄なところに定める意味です。

そして、墓 자체が多様化し、亡骸を祭る埋め墓（うめはか）だけの単墓制、埋め墓と祖靈の宿る詣墓（まいりはか）の双方を祭る両墓制となつたり、と単墓制、さらに埋め墓も屋敷内に祭る屋敷墓など、様々な埋葬方法が出てきます。

さらに、土を盛つた「陵」も多様化します。横穴式の石舞台古墳のやうなケルト人のドルメン（支石墓）もあり、旧人のネアンデルタール人にも、ムスティエ文化といふ埋葬の文化が存在します。旧人はすでに祭祀の民だったのです。それが新人に継承されたといふことです。

そして、後に述べますが、前方後円墳の場合も、前方部にも葬ることがあり、ここに葬られるのは、後円に葬つられた人の子孫であり、前方部が次第に巨大化したのは祭祀の祭壇の盛大化を意味するのです。